



around the world

## ミャンマーとアフガニスタン 国連大使をめぐる攻防

毎日新聞ニューヨーク支局長 隅 俊之

国連におけるアフガニスタンとミャンマーの正統な国連大使はいったい誰なのか。二〇二一年、ニューヨークの国連本部で、混乱が続く二つの国の外

交官の命運に大きな注目が集まった。

国連大使は、加盟国で実際に政権を握る政府から派遣された、その国の立場を代表する外交官だ。国連総会の会期（一年）ごとに信任状が提出され、国連総会に属する信任状委員会の審査を経て承認される。通常なら信任状を確認するだけの、儀礼的な手続きだ。

ただ、武力政変を起こした「グループ」が権力を掌握し、国際社会が政府として承認していないのに独自に国連大使を任命すれば、その人物は正統な代表なのかという疑義が生じる。アフガンとミャンマーではそれが起きた。

ミャンマーでは二二年二月、国軍がクーデターで実権を掌握。国連総会の会合で国軍を公然と非難したチョーモートウン国連大使を解任し、元国軍幹部のアウントゥレイン氏を新たな国連大使に任命したと五月に国連に通告した。だが、クーデター前の民政に任

命されたチョーモートウン氏も、自分こそが正統な国連大使だと訴えた。

一方のアフガニスタンでは二二年八月、米軍の撤退に伴うイスラム主義組織タリバンの猛攻で、当時のガニ政権が崩壊した。暫定政権を発足させたタリバンは、報道担当幹部のシャヒーン氏を国連大使に任命したと九月に国連に通告し、ガニ政権が任命したイサクザイ氏の任務は「終わった」と主張した。ただ、イサクザイ氏も自らがアフガニスタンを代表する国連大使だと主張してきた。

どちらの言い分が正当なのか。注目されたのは先述の信任状委員会だ。米口中を含む九カ国の委員で構成する信任状委員会は、毎年一月ごろに会合を開き、国連大使の正統性をめぐる対立があれば議論する。ただ、取材した構成国の外交関係者は、かなり早い段階で「結論は先送りされる」と断言し

ていた。理由を聞くとこう答えた。「どちらが正統な大使なのか、誰も表立って判断したくないからだ」。

ミャンマーでは国軍の激しい武力弾圧が伝えられ、欧米諸国は強く非難してきた。ただ、この外交関係者によると、米国などはアウンサンスーチー氏ら民主派の「挙国一致政府（NUG）」が「武力闘争」を宣言するなど過激色を強めていることも懸念していた。このため、欧米諸国もNUGが推すチョーモートウン氏を強く支持するには「ためらいがある」というのだった。

一方のアフガニスタンでは、欧米諸国はタリバンに懐疑的だが、中口もタリバンが国内のイスラム過激派を抑え込めるのか懸念している。外交関係者によると、信任状委員会では、人権問題や過激派問題など「タリバンが国際社会に約束した条件を満たすまでは承認は難しい」との認識でほぼ合意して

いたという。一方で、ガニ政権は既に存在せず、イサクザイ氏の承認は妥当性に欠けるといふ事情もあった。

ミャンマーとアフガニスタンをめぐると中口の間で隔たりがある。ただ、片方に積極的に肩入れするのは避けたいという点では一致していたようだ。「ベストな選択は何も判断しないこと」（外交関係者）という思惑が働き、信任状委員会は二二年一二月月上旬の会合で判断の先送りを国連総会に勧告。国連総



2021年2月の政変後、ニューヨークの国連総会会合で演説するミャンマーのチョーモートウン国連大使。国連のユーチューブチャンネルから（AFP=時事）

会もそれを無投票で承認した。二二年九月の国連総会の一般討論演説で両国の国連大使はともに登壇を見送ったが、それには「問題は先送りして事を荒立てない方がよい」という各国の思惑が背景にあったとみられる。

今後はどうなるのか。国連総会規則では、結論が出なかった場合は現職の大使が職にとどまることになっており、チョーモートウン氏とイサクザイ氏は留任が決まった。ただ、イサクザイ氏は二二年一二月中旬、突如辞任した。後ろ盾となるガニ政権が既に崩壊し、「自信を失いつつあった」という。外交関係者によると「この玉虫色の状態が当面続く」といい、アフガニスタンの正式な国連大使は空席のままになる。ミャンマーのチョーモートウン氏も留任はするが、国軍が権力掌握の既成事実を進めており、厳しい状況に追い込まれていくのは否めない。●